

続澄江堂雜記

芥川龍之介

青空文庫

一 夏目先生の書

僕にも時々夏目先生なつめの書を鑑定かんていしてくれろと言ふ人がある。が、僕の眼光ではどうも判然とは鑑定出来ない、唯まつ赤な贋にせものだけはおのづから正しやうたい体を現はしてくれる。僕は近頃その贋にせものの中に決して贋にもものとは思はれぬ一本の扇あふぎに遭遇した。成程なるほどこの扇に書いてある句は漱石そうせきと言ふ名はついてゐても、確かに夏目先生の書いたものではない。しかし又句がらや書体から見れば、夏目先生の贋せものを作る為に書いたのではないことたしも確かである。この漱石とは何ものであらうか？

太白堂三たうはくだうさんせ

世^い村^{むら}田^た桃^{たう}鄰^{りん}も始めの名はやはり漱石である。けれども僕の見
 た扇はさほど古いものとも思はれない。僕はこの贗せものならざ
 るに贗せものと呼ばれる扇の筆者を如何^{いか}にも氣の毒に思つてゐる。
 因^{ちなみ}に言ふ、夏目先生の書にも近年はめつきり贗せものが殖^ふえたら
 しい。(大正十四年十月二十日)

二 霜の来る前

毎日庭を眺めてゐると、苔^{こけ}の最も美しいのは霜^{しも}の来る前、——
 まづ十月一ぱいである。それから霜の来る前に「カナメモチ」や
 「モツコク」などの赤々と芽をふいてゐるのは美しいよりも寧^{むし}ろ

もの哀れでならぬ。(同年十一月十日)

三 澄江堂

僕になぜ澄江堂ちようかうだうなどと号するかと尋ねる人がある。なぜと言ふほどの因縁いんねんはない。唯いつか漫然と澄江堂と号してしまつたのである。いつか佐佐木茂索君ささきもさくは「スミエと言ふ芸者に惚れたほんですか？」と言つた。が、勿論もちろんそんな訣わけでもない。僕は時々ほんみやう本名ほんみやうの外ほかに入らざる名などをつけることはよせば好かつたと思つてゐる。(十一月十二日)

四 雅号

しかし雅号ががうと言ふものはやはり作品と同じやうにその人の個性を示すものである。菱田春草ひしだしゆんさうは年少時代には駿走しゆんそうの号を用ひてゐた。年少時代の春草は定めし駿走らしかつたであらう。さう言へば正宗まさむね白鳥むねはく氏も昔は白塚はくちようと号してゐたかと思ふ。これは僕の記憶違とひかも知れない。が、若し違つてゐないとすれば、この号も兎とに角年かく年少時代の正宗氏を想はせるのに足るものであらう。僕は昔の文人たちの雅号を幾つも持つてゐたのは必しもかならず道楽こしらに拵へたのではない。彼等の趣味の進歩に應じておのづから出来たものと思つてゐる。(同前)

五 シルレルの頭蓋骨

シルレルの遺骸ゐがいは彼の歿年、——千八百五年以来、ちやんとワイマアルの大公爵家の靈廟れいべうの中に収められてゐた。が、二十年ばかりたつた後のち、その靈廟を再建さいこんする際に頭蓋骨づがいこつだけゲエテに贈ることになつた。ゲエテは彼の机の上にこの旧友の頭蓋骨を置き、「シルレル」と題する詩を作つた。そればかりではない。エエベルラインなどは御苦勞にも「シルレルの頭蓋骨を見守れるゲエテ」とか何なんとか言ふ半身像を作つた。けれどもこれはシルレルではない、誰か他の人の頭蓋骨だつた。(ほんたうのシルレル

の頭蓋骨はやつと近年テユウビンゲンの解剖学かいぼうがくの教授に発見された。僕はかう言ふ話を読み、悪魔のいたづらを見たやうに感じた。他人の頭蓋骨に感激したゲエテは勿論滑稽こっけいに見えるであらう。しかしその頭蓋骨がなかつたとしたらば、ゲエテ詩集は少くとも「シルレル」の一篇を欠いてゐたのである。(十一月二十日)

六 美人禍

ゲエテをワイマアルの宮廷から退しりぞかせたのはフォン・ハイゲンドルフ夫人である。しかも又シヨオペンハウエルに一世一代の恋れ

歌んかを作らせたのもやはりこのフォン・ハイゲンドルフ夫人である。前者に反感を抱いた女性は彼女の外ほかになかつたらしい。後者に好感を与へたのは勿論彼女一人である。兎とに角かく両天才を悩ませただけでも、ただの女ではなかつたのであらう。現に写真ちやうに徴ちやうすると、目の大きい、鼻とがの尖とがつた、如何いかにも一癖ありげな美人である。

(二十一日)

七 放心

僕は教師をしてゐた頃、ネクタイをするのを忘れたまま、澄あままして往わう来らいを歩いてゐた。それを幸あひまにも見つけてくれたのは当

年の菅忠雄君である。しかしその後学校へ行つたら、今度は物理の教官が一人、カラアをつけるのを忘れたと見え、ネクタイだけシヤツにぶら下げてみた。どちらがはた目には可笑しかつたかしら。(二十二日)

八 同上

僕は菊池と長崎へ行つた時、汽車中大いに文芸論をした。そのうちにふと気がついて見ると、菊池はいつか両手の間にパラソルを一本まはしてゐる。僕は勿論「おい、君」と言つた。すると菊池は苦笑しながら、隣にゐた奥さんにパラソルを返した。僕は早

つそく
速文芸論の代りに菊池きくちの放心を攻撃した。菊池の降参したのは
この時だけである。が、長崎を立つ段になると、僕自身うつかり
上野屋うへのやへ雨外套あまぐわいたうを忘れて来てしまった。菊池の嬉しがるまい
ことか、忌々いまいましくも大笑ひをして曰いはく、「君も亦細心またさいしんは誇れな
いね。」（同上）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

続澄江堂雑記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>